
短 報

越冬地におけるチョウゲンボウの体重変化

川本美千夫¹

はじめに

チョウゲンボウ *Falco tinnunculus* は、山口県ではふつうの冬鳥（山口県立山口博物館 1988）で、干拓地などに飛来し越冬する。チョウゲンボウが毎年越冬するということは、この生息地が、チョウゲンボウにとって冬を無事にすごせると同時に、繁殖期に備えることもできる場所であることを示唆している。このことを実証する上で、越冬期のチョウゲンボウの体重とその変化を知ることに関心がもたれた。

そこで、越冬中のチョウゲンボウの雌1羽を食物で秤の上に誘ってのせ、体重を測定することを試み、2シーズンにわたって計測できたので、その結果を報告する。

調査地および調査方法

山口県防府市大道干拓で、1992年1月7日から1992年2月24日と1992年11月2日から1993年3月2日までの期間で、43日間測定した。

調査場所にチョウゲンボウが現われた15時から16時頃を中心に、秤を地面に固定した（図1）。受け皿には浅い容器の中に食物を入れて固定し、容器と食物の重量をあらかじめ記録しておいた。飛来

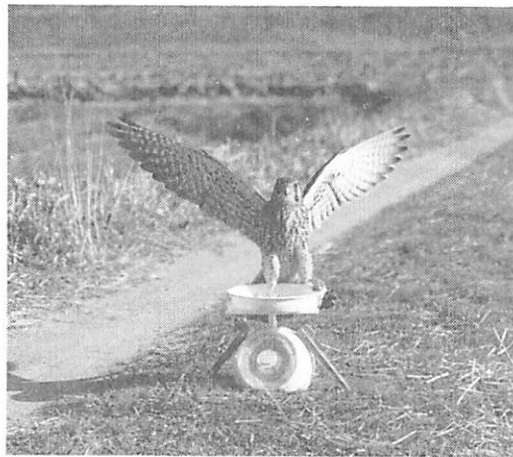


図1. 秤の上のチョウゲンボウ.

Fig. 1. A female Kestrel on the scale.

1993年12月27日受理

1. 〒746 山口県新南陽市日地町2-18, B-34

したチョウゲンボウが秤によって食物を食べはじめ、秤の指針が安定したときに双眼鏡で指針を読みとり、記録した(図1)。この重量から皿と食物の重量をひいた値をチョウゲンボウの体重とした。

観察者の与える食物がチョウゲンボウの体重にあまり影響を与えないように、1回に与えたミールワームの数は20匹2g程度にした。

調査したチョウゲンボウの雌は、川本(1991)が報告した個体と同じと思われた。

観察にあたってはノートへの記録と写真撮影、ビデオ撮影を行なった。体重の計測には500g計の秤を使用した。

結果および考察

図2に1992年1月7日から2月24日の測定結果を示した。測定をはじめた1992年1月7日では240gであった。測定値は1月28日まであまり変化がみられず、1月31日には増加し、2月4日には減少していた。この変動は、1月31日の測定前にチョウゲンボウが食事をしていたためだと思われた。測定値は2月4日228gから増加をはじめ、2月23日には最高値285gを示した。この図での体重の最大幅は57gで、最低値228gから25%の増加であった。1992年は2月24日を最後に、チョウゲンボウは繁殖地にむかったらしく、以後、調査地において姿をみることはなかった。

図3に1992年11月2日から1993年3月2日までの測定値を示した。11月2日には270gだった。1992年の秋に調査地においてチョウゲンボウを最初に確認したのは10月15日であったが、越冬地に飛来直後で警戒心が強く、11月2日まで測定できなかった。11月27日までの25日間のあいだにも測定を試みたが、測定できなかった。このシーズンの測定値で、チョウゲンボウの最低体重は1月10日の225gであった。その後増加し、3月2日には最高値の292gとなった。体重変化の最大幅は67gで、最低値225gから29.7%の増加であった。図3では11月から1月にかけては一定、あるいは減少、1月末から3月はじめにかけて除々に増加している。1993年の体重測定は3月2日を最後に、チョウゲンボウは繁殖地にむかったらしく、以後調査地で姿をみることはなかった。

今回の調査で、チョウゲンボウの体重が春に増加しているのがよくわかった。この測定値ではチョ

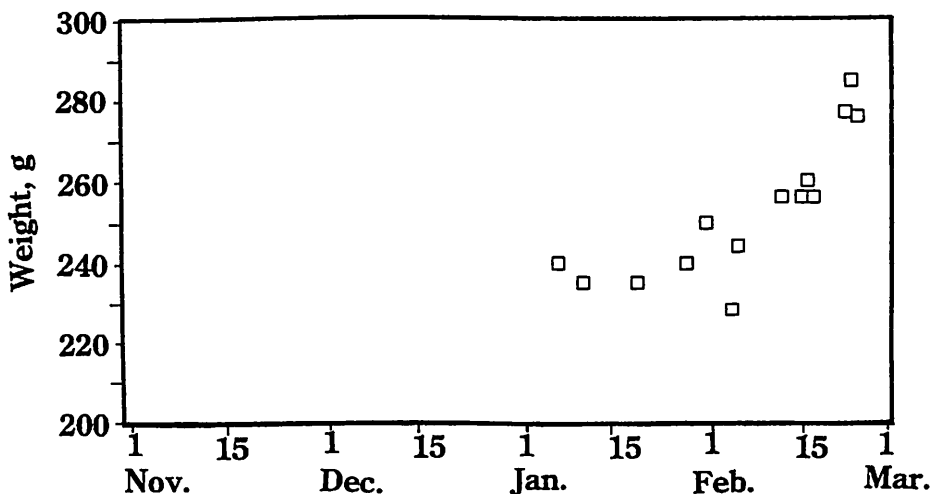


図2. 1992年1月から2月にかけてのチョウゲンボウの体重変化。

Fig. 2. Weight of the female Eurasian Kestrel in January and February 1992.

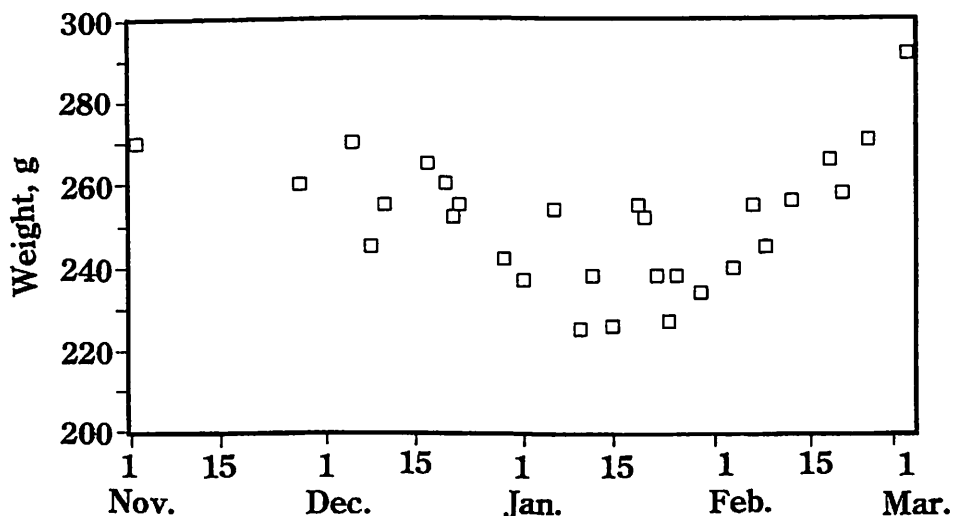


図3. 1992年11月から1993年3月にかけてのチョウゲンボウの体重変化。

Fig. 2. Weight of the female Eurasian Kestrel during November to March, 1992 to 1993.

ウゲンボウの体内にどれだけの食物があったかはわからない。著者の観察によれば、チョウゲンボウが1回の食事で食べる食物量は、ズズメであれば1羽である。1993年1月10日の体重225gが1993年3月2日に292gになるのであるから、その差67gからズズメの体重22-26g（清棲 1978）をひいても45-41g残るからチョウゲンボウの体重が増加しているのは明らかである。

また、1992年1月31日と2月4日の体重差は約22gであり、ズズメ1羽にあたるので、この測定値のバラツキは測定前に食物を得ていたかどうかに関係しているかもしれない。いずれにしても、1月以降、測定値が徐々に増加していることは確実である。

調査を行なった大道干拓には、1991年から連続してチョウゲンボウが越冬している。図2と図3を比較すると、チョウゲンボウが越冬地からいなくなる時期がほぼ同じである。体重の増加も同じような傾向をみせ、越冬地からいなくなる直前の体重の値が近い。このことから、この干拓地はチョウゲンボウにとって冬を過ごし、体重を増加させ、繁殖に備えるために必要な環境を十分備えているといえる。もし冬期にかぎらず、干拓地の急激な変化、たとえば干拓地の工場化などがあれば、そこに生息する鳥にとっては大きなダメージになると思われる。

今後はチョウゲンボウの保護のために、越冬地の環境やチョウゲンボウの行動範囲、食物となる昆虫やズズメなどの現存量と体重の関係などについて調査する必要があると考える。

引用文献

- 川本美千夫. 1991. 人工給餌によるチョウゲンボウの食性調査. *Strix* 10: 296-300.
 清棲幸保. 1978. 増補改訂版 日本鳥類大図鑑 I. 講談社, 東京.
 山口県立山口博物館. 1988. 山口県の野鳥ガイド. 山口県立山口博物館, 山口.

The weight of a female Eurasian Kestrel in the wintering ground

Michio Kawamoto¹

1. Luring a Kestrel *Falco tinnunculus* with mealworms onto a scale, I measured its weight 28 times, at Daido-Kantaku, Hofu City in Yamaguchi Pref, during two winters.
2. Although the body weight might sometimes have included the weight of undigested food, the weight of the Kestrel increased through winter toward spring.
3. The maximum weight was 292g, and the minimum was 225g: a difference of 67g.
 1. Hijimachi 2-18, B-34, Shinnanyou-shi, Yamaguchi 746